

## 【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.9】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

私は音楽もさることながら、ダンス、踊ることが大好きである。

ピアノは3歳から始めたが、その後、小学校に入る前に日本舞踊も始めた。「リズム感がいいね」と先生にはよく褒めてもらったが、そのせいか、きりっと極めるところの多い男舞もよく踊らせてもらった。

この舞におけるリズム感というのが、「間」とか「間合い」である。「間が悪い」という日本独特の表現の場合、非常に柔らかなニュアンスで受け止めることができるが、実際のところは、かなり「バッカじゃないの～（東京方面）」「アホとちゃう～（大阪方面）」という呆れモードが入っている。それぐらい、「間」というのは何かにつけて重要なのである。

リズムは音楽の3要素の一つであり、私の大学の卒業論文のテーマ「生体リズム」にも関連し、会社に入って「音響工学」の研究開発を始めたときも「心地良い低音再生」と「リズム」は密接に関係し、私のライフワークである「ジャズ」の演奏は、リズム感が悪ければ聴いていられないくらい超重要要素である。そして、リズムは全ての波動における振る舞いということになるが、「間合い」は、リズムの良し悪しを決めるファクターであり、一瞬の無、一瞬の呼吸、一瞬の集中、一瞬の空白、がもたらす高次元の境地に達するものである。

日本古来から、「美」には常に「適切な間合い」が存在し、これが絶妙の「バランス」をもたらす。服装の美しさでも、上から下までコテコテすると単なる暑苦しい人になるだけ。服装の中でも、和装（着物の着こなし）が最もわかりやすい事例になると思うが、半襟や八掛、帯締めや帯揚げ、などなど、ちょっとしたところの調和と遊びの完成度の高さが、「粋なおしゃれ」に通ずることになるだろうが、これなども「どこで抜くか」「なにを抜くか」を、色や柄、風合いの間合いを図ることで「垢抜ける」ことができる。

私の母は、茶道や華道や書道やと、「道」のつく心得に長けており、私はその影響を多大に受けて育った。もうずいぶん前のことになるが、ある時、母が、書の展覧会に出展するというので、かな文字の文章を作品に仕上げ、そのいくつかを眺めながら、私に「どれが一番いいと思う？」と訊いてきた。たしか3つ4つ同じ作品が並んでいたが、率直に「これがいい」と、指し示した。母は「なぜ、それがいいの？」と訊いてきた。「だってリズム感があるもん」と答えたのを鮮明に覚えている。その時は、なにげなく、そう感じてそう答えたが、今にして思えば、あれはなかなかいい直感であったと思う。

しばらくたって、書について母を話し合ったことがあったが、一文字一文字の形や大きさや太さや濃淡や勢いや、というものがあるが、全体の流れで、このあたりの墨は濃くてこのあたりが枯れてきて、このあたりは速く勢いをもって、ここはゆったりと、消え入るように、とか、まるで音楽を聴いているような表現が随所にあった。「なるほどなあ、なんでも通ずるところがある」と大いに納得した。

それから 10 年以上も後になるが、書家の武田双雲さんと、私のジャズでコラボレーションをしたことがあった。大阪市内の私が通っていた小学校跡地に商業ビルが建って、そのオープニングイベントだった。これといって打ち合わせもなく、双雲さんは「賑」という一字を、3メートル四方のキャンバスに書かれるという、双雲さんは「自分のイメージは宇宙の起源から命が生まれて爆発する」、「このあたりから始めて、ここでガーッと走って、ここが宇宙がくるくるしているイメージで、ここで終わる」と、わかるような、わからないような、そんな言葉で、直前に小さな紙に書いて説明してくださったが、あとは本番で書の動きに合わせてジャズピアノソロを即興で弾くだけだ。本番での書とジャズのコラボレーションを初体験して、「間合い」の絶妙さをつかんだのは言うまでもない。

さて、ダンスに話を戻すが、音楽と舞踏、舞踊は切っても切り離せないくらい密な関係がある。クラシックで演奏される楽曲には、舞曲と呼ばれるものが膨大にある。ジャズのルーツ、ニューオリンズのコンゴスクエアでは、青空市場で、アフリカやカリブの歌を歌い、踊り、太鼓を叩き、人々は身体を音楽にゆだねることで、開放され、自然とスウィングのリズムが生まれてきた。それも、人と人が織りなす独特の「間合い」。

最近、暮らしの中にサイバー空間でのやりとりが圧倒的に増えてきた。今後も増え続け、AIと共生する時代が令和からのちの世の中。この世の中で、心地良い「間合い」を忘れ去っては、人間の生体リズムが崩壊していく、そうすると心地良い笑顔が消えていく。そうならないための知恵を出し続けていきたい。



次回に続く。。。